

ケニア訪問から 1 ヶ月半が経つ。
今改めて、訪問時に書いた自分の日記、撮影した写真を見ていると、
あの瞬間の記憶が鮮明に蘇ってくる。
それだけケニア訪問は私にとって刺激的で記憶に残る 13 日間だった。

訪問を通して私がケニアで得たもの。
それは、陳腐でありきたりな言葉が記された日記や、
メモリいっぱい写真では表現することのできないもの。
それは、“五感を使って私自身が感じ得た経験”そのものだ。

初対面の私に向けられる村人の笑顔。
学校から聞こえてくる歌声。
訪問先すべてで出されるチャイの甘い香り。
日本よりも甘みの強い数多くのフルーツ。
出会った時必ずする握手から感じるぬくもり。

ごみが散乱するでこぼこの道路。
スラムの子供たちが口にする「How are you?」という言葉。
スラムに降りた瞬間に感じる鼻を刺すような臭い。
最後まで好きになることのできなかつたウガリ。
毎朝寒い中浴びる雨水のシャワー。

どれもが日本では感じることのできないものばかりだった。
本やテレビから抱いていた漠然としたアフリカのイメージ。
これらのイメージは私の実経験をもとに崩れ去った。

訪問直後の数日間。
“日本にあってケニアにない物”ばかりが目についた。
パソコン、テレビ、エアコン、冷蔵庫だけではない。
ガス、電気、水道などのインフラ。
日本ではあまりに当たり前になっているものがない。
“貧”
それは私が感じずにはいられないケニアだった。

訪問 1 週間後。

“ ケニアにあって日本にないもの ” が見えるようになってきた。

初対面の異国人に対する見返りを求めない優しさや配慮。

村の人全員が家族のように互いに向けあう気遣い。

彼らが当然のように持ち合わせているものを日本人は持っていない。

あるいは失ってしまった。気がした。

“ 貧 ”

それは私が感じるようになった日本人の心だった。

そして帰国後。

私はそれまで強く意識することのなかったことを考えるようになっていた。

- ・ 自分の人生は自分自身で切り開いていくものだ。
- ・ 自分が生かされている世界に何かを還元すべきなのではないか。

物はないが、それでも楽しみ、工夫し、

自分たち自身の力で支え合いながら生活しているケニアの人々。

彼らと過ごした日々は、

私が “ 真の富 ” とは何かを考えるヒントを与えてくれたように思う。